

新居みどり ただいまより東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターが進めている協働実践研究「山西・小山班」のプレフォーラム「多言語・多文化社会の広がりとコーディネーター——福祉、学校教育、日本語学習支援、国際交流協力の現場から——」を開催いたします。第1部は、登壇者の皆さんに各実践現場のご報告をお願いします。その後、質疑応答を設け第2部に入ります。

協働実践研究「山西・小山班」のメンバーを紹介します。東京外国語大学の特任研究員の小山紳一郎、同じく特任研究員の山西優二、次が研究員の丹下厚史、同じく研究員の阿部一郎、本センターのプログラムコーディネーターをしております杉澤経子です。研究班のサブコーディネーターをしております加藤丈太郎です。そして私は、今日の進行担当の研究班サブコーディネーターをしております新居みどりです。

それでは、初めに本センターの紹介と協働実践研究の説明を杉澤がいたします。

杉澤経子 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターの紹介を少しだけさせていただきます。東外大はご承知の通り、言語、地域文化を研究しているということで、海外に出て行く人材を養成してまいりました。ところが1990年代以降、日本国内における多言語・多文化化が進展する中で、そうした問題に対応できる人材も育成していくべきだろうということで、本センターが立ち上げられました。当初は学生自身が地域の中での課題を発見してその課題に取り組むという、学生の活動から始まったというのが、このセンターの大きい特徴です。理論ありきではなく、現場の足元の課題からつくり上げられてきたセンターということを、私たちはセンターの基本として大切にしていきたいと思っております。

そういう中でセンターとしては、3つの活動の柱を立てています。国内外で活躍できる人材養成のための教育、またそうした人材を養成していくための基盤となる研究活動、さらに、日本国内の現場の課題解決の活動もやっていきたいと思います。

という社会連携、この3つです。現在、日系ブラジル人が集住している地域で、教育の問題がクローズアップされてきていますが、在日ブラジル人児童向け教材の開発も行ったりしております。また本学の特徴としては、26の言語地域の専門家がいるということで、「東京外国人支援ネットワーク」にも加盟いたしました。教職員、院生などが地域での外国人相談に、通訳として当たるといったボランティア活動も行っており、こうしたことが社会連携です。

そしてこの協働実践研究は2つ目の柱である研究活動のひとつとして、2006年に立ち上がりました。まずは外部の10人の方に本学の特任研究員を委嘱させていただき、多言語・多文化化する日本の国内にある課題にどのようなものがあるかという議論をしてきました。その議論の内容は『多言語・多文化ブックレット』として6冊にまとめられております。07年度には、その議論から抽出された課題に沿って、5つの班ができて、その5つの研究班が動きながら班別協働実践研究活動の発表の場としてプレフォーラムを開催しています。本日はそのうちのひとつ「山西・小山班」のプレフォーラムとなります。全班のプレフォーラムが終わった後に行われる、全国フォーラムでは、全国から多分野の研究者、実践者に集まっていただき、「多言語・多文化社会の課題に迫る！」をテーマに議論を行います。以上で説明を終わります。

